

# 戯曲『十二夜』とフール

宮村 一 幸

## —— 制約のプロローグ ——

専門家を育てる大学とはいえ、学校教育というシステムの中での芸術、特に総合芸術の舞台作りには、商業演劇や他の劇団と異った条件がある。それも一般公開として上演するのだ。前4回は、舞踊・ミュージカル・演技演出の3コースが合同で、美術・照明・音響効果の制作3コースがそれに対応という形で一つの舞台を作ってきた。今回は、舞踊が単独でバレエ「星雲」を30分間上演、ミュージカルと演技演出が合同で、シェイクスピアの芝居「十二夜」を1時間30分で上演するという形になった。15分の休憩を入れて全体で2時間15分の舞台となる。観客の入場時間を考えるとこれより長くは出来ない。美術・照明・音効は両方に対応する。どちらのレパトリーを後先にするにしても15分間の転換時間で幕は開く、15分でハケで建て込める装置となる。ダンスエリアを作ることも装置の条件。劇場を借りるのは午前9時から午後9時まで、メイク落としや道具の後片づけ、楽屋の掃除の時間も含まれる。

前4回の「夏の夜の夢」に代って「十二夜」を取上げた。学生諸君のあまり好まないシェイクスピア劇である。レポートにもある。《 》内は学生のレポート)《古典劇特有の大袈裟な表現／つまらないギャグ／何が楽しくて毎年芸大は古典劇をやるのだろうか》にもかかわらず、なぜシェイクスピアなのか？なぜ「十二夜」なのか？流行に関係ない普遍的な人間性が描かれているという他にも理由はある。「夏の夜の夢」もそうだが、まず、歌・踊りの場面と芝居とがあり、各コースの勉強の成果を発

揮できる。大学教育は専門の知識・技術を基本から身につけることにある。そして矛盾するようだが全体の演技力が問題になる。3回生時の学生の技量でもって、学外の不特定多数の観客に入場料をいただいて足を運んでもらい、プロの使う劇場で時間を過ごしてもらうには、それなりの工夫がいる。日常に近い心理劇・セリフ劇は演技力を必要とする。これは勉強の課題ではあるが、今すぐの役には立たない。だが、日常より遠い時代・異文化・身近でない人物・おかしな物語ほど、自分を思い切って変化させ演じやすい。また、コスチュームプレイは観客の目に楽しく、日常的な下手な会話で気恥ずかしい思いをせずに気楽に見てもらえるというものだ。

「十二夜」1時間30分のうち、芝居1時間、歌・踊り合せて30分の配分。出演者は21名の演技生と19名のミュージカル生、うち女性が27名。3回生の授業としての上演だから全員が役に付く、付かなければならない。しかし、セリフの量は平等ではないし、人それぞれにやりたい役がある。“人は石垣、人は城”とか、人で石垣を表現してみたいと思うが、それには石垣の衣裳が必要になり金が掛り、そのうえ人は石垣になりたがらない。配役を発表した時の恨めしげな眼差し、演出者は嫌われ役という役目もある。その後、挨拶もしてくれなくなる毎年の状況に心を寒くしながらテキストレジをする。「十二夜」全2078行(小田島雄志訳・白水ブックス)のうち、カット1065行。新しい歌が加わり上演台本は1013行、原作の約半分の長さになった。長ゼリフは大巾に省略、セリフの少ない人物にも舞台に出る機会を多くし、見せ場を作る。これは稽古時間中の役者諸君の熱心度と成長いかに掛っている。

## ——19人の道化——

授業で、特に合同で仕事をする学外公演では、戯曲を決定する条件として、登場人物に複数にできるキャラクターが入っているかどうか問題になる。「夏の夜の夢」ではパックを含む妖精たち。この人間離れしたキャラクターは、突然に変身したり分身しても納得できるし、人数によって様々な切り口を見せる事が出来る。5人のパックは5人でなければ表わせない仕事・動き・しゃべりがあった。舞台に登場させるかぎり、舞台に必要な数の人物たちとして活躍してもらおう。

今回“道化”がこの本を取上げる決手だった。原作に登場するのはフェステという clown 1人で、fool は出てこない。しかし“道化”と言う名でまとめることでキャラクターの可能性を広げられるのではないか。彼らはフルであれクラウンであれアルルカンであれ、巾広芸達者の芸人だった。古くは中世の語り部、旅音楽師、吟遊詩人、才能に恵まれた軽業師、歌い手、踊り手であり、王侯貴族専用の宮廷道化師ともなれば、面白い仕種や言葉で笑わせるだけでなく、無害でありながら博識でなければ務まらなかった。逆に受手の側も石頭のコチコチではどうしようもない。道化が自由に才能を発揮できるのは、彼らの皮肉や風刺を笑える器量がないと成り立たないし、歌や踊りや磨きあげた芸を楽しむ文化の根があってこそと言えよう。「十二夜」では、シャレやユーモアを理解しようとしぬ執事マルヴォーリオは、煙たがられ、苛められる。タロットカードの fool はジョーカーで、ゼロでもありオールマイティでもある。複数で表現するのに持ってこいの役柄ではないか。fool は花咲く道を犬に吠えられながら、袋を括りつけた棒を担いで歩いている絵で表わされている。この棒を智恵棒、袋を智恵袋と呼ぶことにしよう。この小道具を存分に使って彼らの見せ場がつかれる……智恵棒で叩かれた智恵袋が飛び交い、智恵棒の受け皿がハッパと受け止め……とプランは膨らんでいた。しかし、演出者の意図とは裏腹に、道化役についた 19 人の女性たちの受け止め方は楽しいも

のではなかった。

《役に付けなかった 19 人を安易に道化にしたようで淋しい思いをした／道化役がやりたかったのに、アンサンブル＝道化、という形になりショック》また、ミュージカル生と演技生とで混成された 19 人は、授業の時間割が違って、稽古そのものが困難だった。初めて顔を合わせる人も多く、意見を言い合うどころか会話もなかった。そんな焦りの中で彼女達が考え出したのが“道化会議”を持つことだった。《遅かったけれど、話し合う事でお互いに悩んでいた事も分り、練習の時にも意見を言い合えるようになった／もめてもめて多数決で決める程だったが楽しかった、残り少ない稽古に励む気持ちがわいてきた》一人が交通事故で入院した時は、皆が肝を冷した。幸いすぐに復帰できたが、生きた人間が素材の舞台である、一人一人の大切さが身に染みたことだろう。19 人の試練は続く。

“装置のない舞台はあっても、衣裳を何も着ない舞台はない”と亡くなった美術の金子先生が言っておられた。衣服は非言語コミュニケーションである。美術は装置・小道具・衣裳全てに対応しなければならない。道化服は 19 人分、帽子 19 人分靴 19 人分、ラストの女装 19 人分、智恵棒と袋各 19 人分が必要となる。《衣裳やシューズはゲネのぎりぎりまで縫っていた、なぜ道化役だけが衣裳作りに追われるのか／なぜ美術の衣裳係が 1 人なのか／智恵棒・智恵袋を使いこなす時間がなかった／重い、腕がしびれた》智恵棒と袋は、始めに出来たものが稽古の途中で簡単に壊れてしまった。もっと丈夫なものが必要と、外部の専門家に発注したら出来上りが遅れ、多くの人が使いこなすどころか慣れることさえ出来なかった。舞台で使う道具はデザインだけでなく、素材、作り方、使い勝手、効果、その上全体との調和が必要だ。上演という結果も授業なら、作っていく過程も授業なので、演出者といえども他の専門分野に直接口を出せない。しかし先生方は毎日出校される訳ではないので伝達がどんどん遅れる。勝手に個人として働いてしまう訳にもゆかぬ。始めに道化役の人達に自分でデザインを描いてもらった。(図) それを使っていたらどんな技が出来ただろうか、いつかは使おう。

19人という道化の数について《道化役の個性があまり見られず“その他多勢”になってしまう》と言う人と《個人をよく見ると、少しずつ表情が違って細やかな演技に感動した》と両論がある。“その他”の大切さは、舞台では全身を観客の前にさらしていることにある。映像と違って主役だけがアップになっているのではない、観客の目は誰を見るかわからない。

### ——双子はややこしい——

幕開き前のプロローグ、貴族の娘ヴァイオラの乗った船が嵐で難破し、双子の兄セバスチャンと離ればなれになるところから始まる。ヴァイオラは船長と2人、命ながら異国の岸に辿り着いた。この大嵐のシーンをオーディオドラマ風に仕上げ“水夫：マストが折れるぞー”などと書き加えたら、マストは折れないと指摘された。

嵐が一段落して緞帳上ると、上手にオーシーノー公爵の館、下手にオリヴィア姫の邸。折しも公爵は恋患いの真最中、姫に使者を送るのだが、色よい返事は貰えず、甘い苦しみにだらしなく浸っている。公爵の館は音楽と花の香りに包まれ、湿気と熱気にムンムンする熱帯植物の温室のイメージ。変って下手の白い壁のオリヴィア邸は、地中海に臨む乾いて明るいイメージ。2階にバルコニー、足元にはコロがついて移動・回転する。この対象的な2つの屋台（ハコ）は、展開して室内を見せる構造になっている。オリヴィアは父と兄を相次いで亡くし、生まじめで堅物の執事マルヴォーリオ、陽気な小間使いマライア、侍女フェーピア（原作の使用人フェーピアンを女性に変更）、叔父のサー・トービーと共に住んでいる。飲んだくれで遊び好きのトービーは、遊び仲間借金蔓のサー・アンドルーを姫の婿にしようとしてけしかけている。喪に服しているオリヴィアをなぐさめるのは19人の道化達、原作のラストでフェステが歌う“**When that I was**…”を19人全員で歌い踊り、最初の登場となる。オリヴィアとの“教義問答”は道化達で演じる劇中劇とする。問答の間、道化達は天国の喜び、地獄の苦しみの様を群舞と組みポーズで表現する、振りつけは動態研究Ⅱ（舞台）大学院2年次の高橋圭司君。他に、9場のフェステ

の歌を公爵とヴァイオラがデュエットで歌い踊る。15場、フィナーレに向けて舞台を空にするため（オリヴィア邸と庭のあずま屋の撤去）黒幕前で、セバスチャンとオリヴィアがデュエット“ひと目惚れのテーマ”（創作）を歌う。すぐ続いて道化19人の歌と踊り“どうしてどうしてこうなるの”（創作）。ラストの道化19人の変身の歌と踊り“そんなに女装が見たいのなら”（創作）があり、マルヴォーリオが騙されて黄色い靴下、十字の靴下止め、ニヤニヤ笑い、とオリヴィアの大嫌いな姿で現われた時のセリフを歌にし、アイリッシュダンスのステップをつける。という具合に歌・踊り・芝居のバランス配分を考えた。（創作の作詞 秋浜悟史学科長・作曲 寺田龍雄氏）

兄の生死も分らないヴァイオラは、船長の協力で男装してシザーリオと名を変え、オーシーノー公爵に小姓として仕える。すぐに公爵のお気に入りとなるが、ヴァイオラも女性として公爵にひと目惚れ。オリヴィアに目がくらんでいる公爵は、恋の使者をヴァイオラ演じるシザーリオに申しつける“おまえこそ適役だ、あの人も初々しいおまえの言葉に耳を傾けよう”それは皮肉にも的を射る。小姓シザーリオが演じた恋の代役はヴァイオラの気持を動かし“女役を演じる少年俳優のような”美しさにこっちもひと目惚れ。今回ダブルキャストのA班ではミュージカルの女子学生が妹、演技の男子学生が兄としたが、B班では演技の男子学生が妹・兄の二役を演じ続け、終盤で兄として演技の女子学生が登場、さらに終幕のカップル誕生の時には入れ代って男性は男役、女性は女役として結ばれるという、ややこしい配役にした。（表）

「十二夜」の主筋であるホレタハレタの恋の追いかけてこは、顔形がそっくりの、それも男と女の双子という設定で、劇中の人物たちの混乱が重要なポイントになる。観客にも混乱してもらおう。学生諸君の受け止め方も賛否が分れた。特にB班について。《実験的な気がしてすごく面白い／演出の思惑通りに混乱、まんまとワナに引掛った／登場人物が混乱させられるのを客にも体験してもらうのは効果的／不自然、人物の設定に気をとられて、後半の展開についてゆけない／分りづらく混乱／演出の意図をはっきり理解できない》 混乱は演出の思惑と言うより、原作者の思惑でもある。公爵は啞然として言う

“1つの顔…そして2つの身体…”役の人物も混乱している。しかし現実には本物の双子でも使わないかぎり、そっくりの2人の役者が揃うことはまずない。舞台には大きな嘘と小さな嘘があり、大きな嘘は約束事として認められる。

### —— 転換と回転 ——

道化の活躍は場面の転換にも及び、賛否両論が盛り上がった。《集団のエネルギー、明るさ、舞台のボルテージを高めた／その他多勢と思っていたが本番では一番印象的、芸大独特／長い転換が間のびしなかった／暗い中の踊り、見せるでもなく見せないでもなく、引っかかる／つなぎに本編が食われてしまっでは元も子もない》場面の転換をどう見せるか、見せ方にもいろいろある。明るい中で、暗い中で、薄暗がり、道具方だけで、役者が役としてやる等々。今回は真暗闇にはしない、観客に分ってもらおうようにする。美術生が屋台を動かし、道化が、時には1人でまた5人で“テンカン・テンカン”と告げながら飛んだり転がったり踊ったりして舞台を横切る、廻る建物を見守る。19人出ていると錯覚した人もあったが“やります”と手を上げてくれた5人で賄った。薄明りの中で働く人と踊る人をほのかに浮き上らせた、まさに見せるでもなく見せないでもなく。その為に屋台のぐるぐる廻しの時間を長く取った。観客の目は、始めはアレっと思ひ、何をしているのかと訝るが、繰返されると“ああ転換か”今度は何を動かしてどんな舞台になるのかと興味もわく。全部の転換場面に法則がほしい。同じトーンの暗さの中に、道化が出る、美術生が出る。ゲネの途中で各転換の照明に違いがあるのに気付いた。何とか統一できないのかと頼みに行ったが、すでに出上がったセッティングは変えられない。転換の稽古自体も、本舞台で道具がセットされてからしか本当の姿が分らない。経験の少ない学生諸君はとまどうことが多いが、本番直前までその芝居をより良くしようと工夫され変化する様を身をもって知る。

上演を終えビデオを見たマライアは、セットに慣れない不自然さがわかったと言う。《稽古時の邸に慣れて、

本番で違和感、邸に慣れていなくてはならない小間使いなのに、こなせなくて残念》オリヴィア邸は大学の20号ホールに仮舞台を造り（部分的には実寸大）稽古をしていた。すべて実寸大の邸を使ったのはドラマシティの舞台で建込みがすんでから。この屋台の下につけたコロがよくきいて、思いのほかスムーズに回転する。これを見逃がす手はないだろう。14場、庭園から室内に移りマルヴォーリオが神に感謝している場面。邸を、20号ホールの時より早く多くグルグルと廻してもらった。もちろん人力、美術生が何人かで押して走る。中でスタンバイしているマライアたち、ゲネの時は急回転に振りとばされそうになり、ヨロヨロフラフラと目をまわしての登場。ところが本番では、中でどう対応したのか何くわぬ顔。舞台では何が起っても何くわぬ顔ですますのが一番。オッ、なかなかやるなどニンマリした。

### —— 変身のエピローグ ——

大詰め、同じ男の服装をしたセバスチャンとヴァイオラの双子の兄妹が再会し、各々に結ばれる。コトの成り行きを、道化達は三々五々、舞台奥の道具の影から見守っている。女の服装をしたヴァイオラを見たいものだとオーシーノー公爵、早く見たい、女装が見たいと言いつのる。さて、どんな事で女装を見せるか。

公爵のはやる気持ちにたまりかねた道化の1人が“そんなに女装が見たいのなら”と歌い踊り出し、自分の道化服を脱ぐ、他の道化も一斉に舞台中央に飛びだし“見せてあげます”と踊りながら、マダラの道化服を脱ぎすて帽子を脱ぎすて髪をさばく。と、女の子まるだしの透けたランジェリールックの女子学生そのものが現われる。19人の若い女性の迫力によりヴァイオラも公爵も他の人々も舞台袖に追いやられて、観客と同じように啞然と眺めている。19人のギャルは舞台前面に踊りながらどんどん出てきて、舞台のハナにずらりと腰かけ足をぶらぶら、その後で緞帳が降りる。ヴァイオラたちは緞帳の中に残る……。その間にもギャルたちは、舞台を飛降り暗闇の客席を中程までワーツと押し寄せてゆく、客は緞帳の中のことを忘れて19人のギャルを追いっぱなし。今の今まで

激しく踊っていた若者が息を整える暇もあらばこそヘアヘアと生々しい息使いで客のそばに立つ。客の中には、思わず声をかけて拍手したという人。“若い人が懸命にやっているのはいいね”と熟年の客。

そこで緞帳が上る。ギャルたちはキヤーと舞台に殺到、駆け上る。客の目もつられて舞台に。そこには真白なドレスに着替えたヴァイオラが公爵に寄りそい、セバスチャンとオリヴィアも寄りそっている。道化以外の登場人物も2人、3人、4人とマスになってポーズ。音楽が変わってギャルがヴァイオラ・公爵にふれると彼らが動き出す。セバスチャン・オリヴィアにふれると彼らが動き出す。ストップモーションが解けて動き出し全員の踊りになる。

ハッと変身、時間を感じさせず豪華なドレスに着替えたヴァイオラの女の魅力を見せる。これが今回の「十二夜」で見せた fool の最高の仕事だった。

- ヴァイオラの女装が見たい公爵
- どういう風に、男から女への変身を見せるのか、客席の関心。

- 一度引っ込めて出すのは当たり前。
- 舞台上で客に見せるのは時間が掛る。

美意識の問題もある。

- 変身は正確に、しくじりのない美しい仕上げ。

〔演出①〕

- 客の気持、視線を他へ移す。〔演出②〕

- 道化 19 人は全員女性という条件。

- 仕上げを、一枚の記念写真のような絵面にする。

〔演出③〕

- フィナーレに続けるため、少しずつの小さな動き、その繰り返しから全体の大きな動きへと……ダンスの龍先生に随分お世話になったシーンです。

《演技生でも踊ったり歌ったりしているのに驚いてしまった／合同ゆえに見えた課題、ミュージカル生の演技・演技生の歌と踊り／演技生が歌、踊りでミュージカル生に張り合うのはプレッシャー／ダンスに対する恐怖、ミュージカル生と一緒に踊るのは無謀》学外での個人レッスンを別としても、ミュージカル生と演技生では、歌と踊りの練習量にかなりの差がある。しかし、役者とは

他者を演じるのが仕事、何でもこなして当たり前、演技生にも歌って踊ってもらった。せっかくの合同での舞台、他コースの分野を身をもって知り、自己の埋蔵資源を掘りおこすチャンス。現代では何もかも専門化・分業化が進んでしまったが、本来、セリフが高揚して歌になり、感情の高まりにじっとして居られず身体が動き出し踊りになる——自然発生的、ポピュラーなものはずだ。まず、トライすることから始まる。最初の頃はとまどい、こわばった表情でモゾモゾときこちない動きの毛虫たちが、少しずつだが確実に変身して行く。《ダンスは単に身体を動かすことではなくて、気持をこめて踊れば客に何か伝わるかも…と思ったら恐怖がうすれて楽しくなった》縮こまっていた羽が外気に晒されて少しずつ伸びてゆく、細い血管に血が通い、やがて蝶は朝の光を浴びて飛び立つ……とまでは言わないが、3ヶ月の稽古を経て本番の舞台では、誰が演技生で誰がミュージカル生やら……とまでも言わないが、彼女達の仕事振りに演出者は舞台袖、あるいは客席で、19人という数のあったことに感謝した。

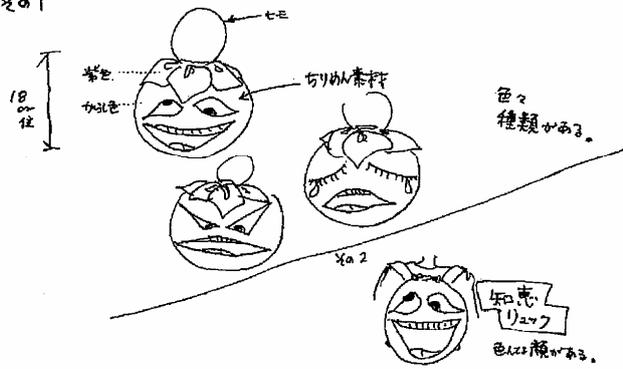
#### “To Dance is Human”

踊るってことは人間らしい

人類学者 ジュディス・L・ハナ

知恵袋

×a1

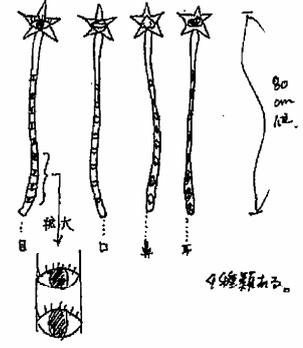


知恵棒

×a1



×a2



(参考)

ミュージカルコース3回生 本江 尚 (図)

・B 班のシーン別 双子の登場

(表)

人物	場	プロダ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
オーシーノ公爵				○		○					○						○
ヴァイオラ (妹)	女	男				男	男		男		男		男			男	○
セバスチャン (兄)	男							男							女	女	○
オリヴィア姫							○						○			○	○
海賊アントーニオ (セバスチャンの友人)								○						○	○		

黒幕前